

中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査 (2)

高屋敷 真人

要旨

本稿は、ログシート（日本語活動日記）を用いた日本語接触場面アンケート調査について報告するものである。この調査は、関西外国語大学留学生別科の中級日本語コース（レベル5）の教材開発のために行われているもので、調査目的は学習者のニーズや興味・関心を重視し、学習者を起点としたコミュニケーション場面〔接触場面〕からのシラバスデザインや文法項目の設定を行うこと、そして、学習者の要望に対応し得る「モジュール型教材」の作成のための資料とすることである。

【キーワード】 中級日本語、ログシート、接触場面調査、シラバスデザイン、雑談

1. はじめに：本調査の背景、目的、及び、先行研究

本調査は、関西外国語大学留学生別科中級前期日本語コース（日本語 5: Japanese、以下、JPN5）において、毎学期、留学生を対象に行っている日本語接触場面に関する実態調査について報告するものである。今回の調査対象の留学生は、中級前期レベル（JPN5）で学ぶ北米を中心とした英語圏からの留学生である。前回の調査報告では、事前調査として過去2年間の3学期間に行われた質問紙によるアンケート調査で、「どのような場面で日本語を使用したいか」、「何について話したいか」という問いについての回答を分析した（高屋敷 2019）。前回の調査結果から明らかになったことは、英語圏からの中級レベルの留学生では、明確な場面は特定できないがとにかく日常生活一般で日本人と話したいと回答した留学生、つまり、日本人との雑談がしたいという留学生が一番多い（65%以上）ということであった。雑談の相手は、場面を問わず、日本人の友人が圧倒的に多かった。また、日本語を何らかの形で将来の自分のキャリアに活かしたいという回答も多く見られ、翻訳者／通訳

者を目指したいという学生も多かった。

次に、「何について話したいか?」という問いへの回答、つまり、留学生の興味・関心については、中級レベルでは、多岐に渡り、特に「スポーツ」、「音楽」、「ゲーム」、「漫画／アニメ」、「映画／TV ドラマ」という回答が学期を通じて多く見られた。しかし、学期によって、「ハイキング」、「Netflix」、「K-Pop」、「料理／和食」などを挙げる学生が多い時もあり、やはり、学期ごとに調査結果を分析し、その時々学生の要望に沿うように、事前に少しでもシラバスや教材を改訂していく必要があることもわかった。更に、前回の報告では、コースで使用する会話教材の作成の際には、学期ごとに事前調査で得た学生の興味・関心とその都度取り入れて、文型や会話の練習用ダイアログを改訂するなど、積極的に留学生の興味・関心のある話題を教材に随時組み込むことで、今後も学習者側から発信したものを出来るだけ教材に反映させるように努めて行くことを提唱した。

今回の報告では、前回は行った、留学生の大まかなニーズと興味・関心を調べる質問紙による事前調査に加え、2019年度春学期から開始したログシート（日本語活動日記）を用いた、より詳しく具体的な日本語接触場面調査の結果について述べていきたい。英語圏からの中級日本語学習者が、日常生活で、いつ、どこで、誰と、どのような内容について話したのか、日本語接触場면을綿密に調査し、その実態を報告したい。

本調査の目的、背景、及び、先行研究については、前回の報告で、詳しく述べたのである。ここでは、再度、簡単に触れるに留める。関西外国語大学留学生別科日本語コースは、秋学期と春学期の二学期制で開講されており、毎年約 650 名の交換留学生が学んでいる。留学生は、一学期のみの短期留学、あるいは、二学期間の長期留学で来日している。別科では、日本語以外の選択科目は英語で開講されており、学生は主に交換留学提携校の約 80% を占めている北米を中心とする英語圏からの留学生である。学生の 7 割は、キャンパス内の学生寮「結」で、日本人学生と生活を共にし、残り 3 割の学生はホームステイをしている。今回の調査対象の中級前期日本語コース（JPN5）は、初級レベルを 1 年半から 2 年で終えて来日して来た学生が多い。本学の学生で例えると、初級教科書『げんき I』と『げんき II』を 4 学期かけて終了した学生に相当する。日本語コースは、1 学期 15 週間で、90 分授業を週 3 回行っている。教科書及び教材は、別科教員が作成したものを使用し、コー

その目的は、日本語能力試験 N2 レベルに合格するための日本語能力の養成である。

この調査は、コース教材の改訂のための資料とすべく 2008 年から続けられている。これまでの授業評価の結果を集約してみると、別科中級レベルで取り上げている文型のうち、例えば、「靴をはいたまま、うちに入ってしまった。」「信じられないほど／くらい、たくさん食べた。」などの文型は、日常でよく耳にし、役立ったという声がある一方で、全く使わなかったという文型や表現があることもわかった。本調査を開始した理由は、教員はこうした学生からの生の声に耳を傾け、英語圏からの中級レベルの留学生が実際の生活で本当に必要としている文型や表現、あるいは会話練習の話題について再調査する必要があるのではないかという結論に至ったからである。

昨今、今後の文法シラバスを再考するために、具体的データに基づいた複数の異なるアプローチを用い、今後の初中級の文法シラバスを再考して行こうという試みが報告されている（庵・山内 2015）。また、既存の文法シラバスが初級では「シンタクスに関わる狭義の文法」、中上級では「複合辞を中心とする機能語の学習」に偏っているのではないかという指摘もある（小林 2009）。このような現行の日本語文法シラバスに関する状況に対して、「学習者の多様化に対応する文法」を再考する必要性、あるいは、日本語学に依拠して選定された日本語文法からの脱却を図り「日本語学習者が日本語でコミュニケーションする時に必要な文法」へと転換していくべきではないかという提唱もされている（野田 2005）。

これら先行研究の指摘を参考にして、本調査でも、英語圏からの中級日本語学習者のニーズや興味・関心は何であるのか、日常生活でどのように日本人と接触を図るのか、彼らが実生活で本当に必要とする中級文型は何であるのかを明らかにすることを調査の目的とした。得られた分析結果は、学習者を起点とした接触場面（ネウストプニー 1995）に基づいたシラバスや文法項目の再考と試用、あるいは、シラバスが限定されている現行教科書から学習者の要望に対応し得る「モジュール型教材」（岡崎 1989）への転換といった点も念頭に、新しいシラバスや教材作成時の資料として活用し、役立てている。

2. 日本語接触場面アンケート調査：2019 年春学期

上述したように、本稿では、前回の調査報告（高屋敷 2019）で、言及できなかった

た 2019 年度春学期の留学生に行ったログシート（日本語活動日記）を用いた日本語接触場面アンケート調査の結果について報告する。調査は、15 週間の学期中、大きな試験がある週を除いた 7 週間、それぞれの週の終わりにログシート（日本語活動日記）を配布し、1 週間の日常の接触場面に関して記録させ、宿題として提出させる形で行われた。下記にログシートの例を示した。

月 日 曜日	どこで?	だれと? 何で?	何をした?	良かった点/ 難しかった点	先生への質問 Any word/sentence you wanted to say in Japanese?
e.g. 2月11日 月曜日	YUI で コンビニ で ホームステイ で	RA と 店員と Netflix で	スーパーへの行き方を聞いた。色々なことを話した (just had a casual chat)。 ノンアルコールビールについて聞いた。 日本のドラマを見た。	たくさん日本語で話せた！ むずかしい単語があった。 alcohol content の日本語がわからなくて、調べた。 Subtitle の日本語で、新しい単語を勉強できた。	I wanted to say, "Which supermarket has a great selection of items?" 'alcohol content'

ログシートを使用した接触場面の調査時期は、2019 年春学期 (2 月から 5 月) で、調査対象者は、JPN5 の 2 クラスの学生、24 名である。留学生の性別、国籍、生活圏は以下の通りである。留学生の母語は、中国人の学生 1 名を除いて、英語である。この中国人の学生は、関西外国語大学留学生別科と提携しているアメリカの大学に留学中で、英語も堪能であった。

性別: 男子学生 9 名、女子学生 15 名

国籍: アメリカ 21 名、オーストラリア 1 名、ニュージーランド 1 名
中国 1 名 (アメリカに留学中)

生活圏: ホームステイ 10 名、 学生寮「結」 14 名

ログシート（日本語活動日記）の回答は、自由記述で、複数回答も可である。留学生には、できるだけ日本語で、学期中、教室以外でどのように日本語を使用したか

記録してもらった。その際、上記の例のようにログシートに

人的接触： いつ、どこで、だれと？

物的接触： いつ、どこで、何で（何を使って）？

というように提示し、「いつ、どこで、誰と何をしたか」という対人型コミュニケーションに加え、日本語で接触した事物（映画、SNS、アプリ、本等）も記録させ、日本語を使用した物的接触についても記録させた。更に、今後コースで取り上げてほしい文型や表現、コミュニケーション時にどのように日本語で表現するか分からなかった文、担当教員への質問等もコメント欄を設け、自由に書き込めるようにした。調査対象者の専攻は、下記の通りである。

専攻：日本語	6名
アジア研究	5名
国際研究/国際関係	5名
日本研究	2名
英語	2名
心理学	2名
メディア	2名
その他	各1名

「その他各1名」の内訳は、コンピュータサイエンス、物理学、ナノテクノロジー、経理、メディア、中国研究、マーケティング、政治学、女性学、言語学、ドイツ語である。留学生は、ダブルメジャーの学生も多く見られ、専攻は多岐に渡っている。

では、具体的な調査結果を見て行こう。調査結果については、紙面の都合で、ここでは、調査の一部概要について述べるに留めたい。まず、事前調査として聞いた、大まかに「どのような場面で日本語を使用したいか？」という問いについて質問紙による調査の結果を図1に示した。図1によると、留学生の一番多い回答は、特定はできないがとにかく日常生活での「雑談」であるという答えが、24名中10名で、一番多かった。また、今は具体的に言えないが、将来、何らかの形で自分の「仕

事」で日本語を使用したいと考えている学生も 10 名で、「雑談」と同数であった。仕事に関しては、翻訳家／通訳を目指していると答えた学生も 5 名いた。

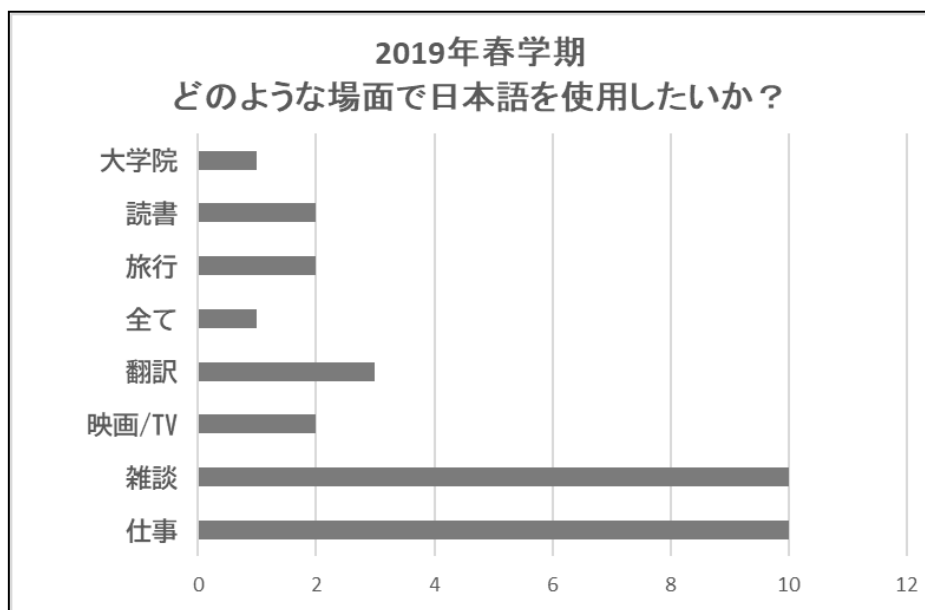


図 1:2019 年春学期「どのような場面で日本語を使用したいか？」

図 2 では、前回の 2017 年秋学期から 2019 年春学期までの調査結果に 2019 年秋学期の 28 名の留学生の回答も加え、過去 2 年間英語圏からの中級レベルの留学生に行った同様のアンケート調査の結果を示した。図 2 の調査結果を見ると、筆者が担当した JPN5 コースの 4 学期間の留学生総数 120 名（グラフ作成時）のうち、明確な場面は特定できないが、とにかく日常生活全般で日本人と話す時と回答した学生が 60 名で、一番多かった。この結果、2019 年春学期履修の留学生だけではなく、過去 2 年間、英語圏からの中級レベルの留学生の多くは、特定の場面ではなく、日常生活時の「雑談」のために日本語を使用したいと考えていることが明らかになった。また、日本語を将来の仕事に使用したいという学生も 40 名を超えており、翻訳者になりたいという学生も 20 名近く見られた。この結果を受けて、今後の中級日本語シラバス改訂、あるいは、文型や会話練習作成の際には、このような学生のニーズを反映して、友人との雑談時だけでた会話のテクニック、ビジネス会話、翻訳法なども組み込んでいく必要があると考えている。

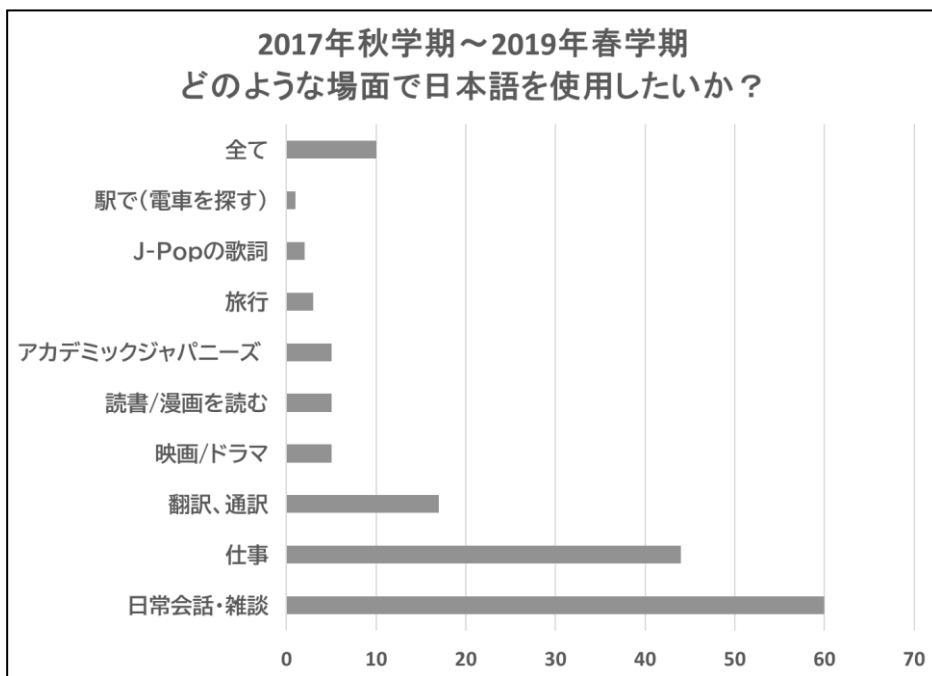


図 2:2017 年秋学期～2019 年秋学期「どのような場面で日本語を使用したいか？」

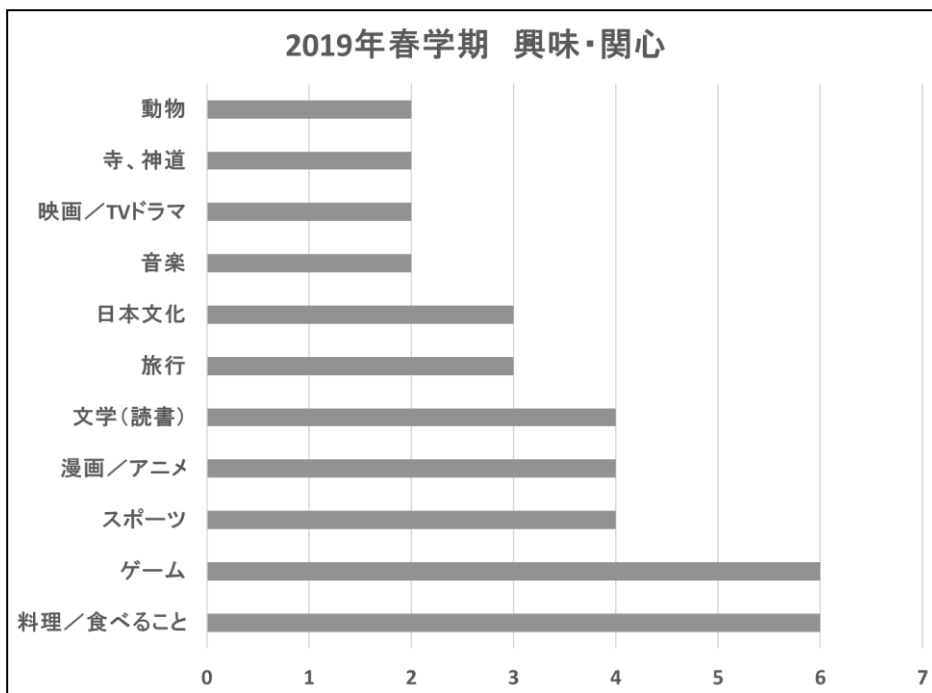


図 3:2019 年春学期「興味・関心」

では、図3で、2019年春学期の学生の興味・関心について見てみよう。2019年春学期の留学生の興味・関心事は、「料理／食べること」という回答が一番多く、スポーツ、ゲーム、漫画/アニメ、読書（文学）も上位を占めた。この結果を前回の報告で明らかにした2017年からの各学期ごとの結果（高屋敷2019）と比較してみると、スポーツ、ゲーム、漫画/アニメについては、例年通りだが、毎学期、人気の高い音楽（J-Pop）、映画／TVドラマへの関心がそれ程でもなく、逆に、このクラスでは、料理や読書（文学）に興味がある留学生が多かったことがわかった。前回の報告でも触れたが、このような学期によって特化した傾向についても、教師が事前にしっかり把握した上で、コース教材に適宜、改訂を加えて行く必要性を感じた。

では、次に、2019年春学期に行われたログシート（日本語活動日記）を使用した日本語接触場面調査の結果を詳しく見ていくこととしたい。まず、下記に接触場面調査の「人的接触」について、ホームステイの学生と寮住まいの学生に分けて示した。接触回数の多かった人物に関しては、接触した場所も記してある。特記のない限り、下記の人物は日本人である。

ホームステイをしている留学生（10名）の人的接触：

ホームステイの家族との接触

ホームステイの家族全員	8回	[接触場所]：ゲーム、パーティー、神戸、淡路島、水族館、レストラン、等
母	17回	[接触場所]：料理、買い物、劇場、等
父	5回	
ハウスメイト（留学生）	2回	
母の友人	1回	
家族の親戚	1回	

キャンパス内での接触

友人	4回	[接触場所]：主に学食、結（学生寮）
知らない学生、外大訪問の高校生、国際交流課スタッフ、守衛	各1回	

キャンパス外での接触

友人	24回
[接触場所]：飲食店（レストラン、居酒屋、カラオケ、お好み焼き屋、しゃぶしゃぶ屋など）、ゲームセンター、Round One、T-site、電車内、空港、友人のアパート、阪神タイガーズの試合、京都、奈良、旅行（広島、熊野、沖縄）、等	
パートナー	2回
スピパ	4回（スピパ：スピーキングパートナー）
知らない外大生	2回

上記のように、ホースステイをしている学生は、やはりステイ先の家族との接触が多い。一番多いのは、ステイ先の母親で、17回であった。家族との接触回数は、母親を含め 30 回であった。キャンパス内とキャンパス外の接触は、日本人の友人が双方、合わせて 28 回で、一番多かった。スピパとは、スピーキングパートナー制度という関西外大で行われている日本人学生と留学生との英語と日本語での双方向の交流を深めるために行われている制度を利用して得た話し相手のことである。次に学生寮「結」に居住する留学生が日本語で接触する相手は以下の通りである。

学生寮「結」に居住する留学生（14名）の人的接触：

学生寮「結」内での接触

RA の日本人学生	8回（RA: レジデント・アシスタント）
友人	13回
[接触場所]：料理、夕食、宿題、ゲーム、エレベーター内、等	
寮生	1回
知らない人	1回

寮以外のキャンパス内での接触

インターンシップ面接官	3回
-------------	----

知らない学生 6回

[接触場所] : クラスで日本語会話ボランティアの学生と、ダンスの催し、卒業式、交流課ラウンジ、食堂、バスケットボールで、等

キャンパス外での接触

友人 35回

[接触場所] : ⇒ 飲食店 (スタバ、カラオケ、居酒屋、お好み焼き屋、猫カフェ、回転寿司、バー など)、電車内、バスケットボール施設、クラブ、梅田 (買い物)、難波、神戸、京都、比叡山、奈良、京セラドーム (Twice コンサート)、くずはモール、銭湯、友人宅、旅行 (東京)、電話で通話、など

スピバ 4回

パートナー 2回

ラグビー部員 1回

以上の調査結果をまとめると、留学生在が日本語で会話をする相手は、ホームステイをしている学生であれば、やはり、ステイ先の家族、特に母親との接触が多かった。キャンパス内あるいは外での交流では、日本人の友人との接触が内外合わせて 28 回で一番多かった。寮住まいの学生の場合では、寮内、キャンパス内外を合わせて、日本人の友人が 48 回で、特筆して多いことがわかる。では、次に、キャンパス外での友人以外の日本人との接触の実態を見てみることにしよう。

キャンパス外での友人以外の日本人との接触 :

ホームステイをしている留学生

飲食店 (レストラン、居酒屋、KFC、COCO 壺、すき家 など) 店員 6回

交通機関 (JR 京橋駅、JR 新大阪駅、空港、枚方バス) 5回

レストラン店主 3回

遊戯施設 (ひらかたパーク、ボルダリングジム、ビリヤード) スタッフ 3回

コンビニ店員	2回
知らない人	2回
居酒屋客、ダイソー店員、警官、水族館スタッフ	各1回

学生寮「結」居住の留学生

飲食店（カフェ、モスバーガー、すき家、火鍋店、スイパラ等）店員	7回
ホテル・旅館・ゲストハウス スタッフ	5回
小売店 店員（ステッカー屋、ピアス店、まんだらけ、浅草下駄屋）	4回
交通機関窓口（JR、枚方バス、フェリー、夜行バス）	4回
街頭（知らない人）	4回
コンビニ店員	3回
遊戯・スポーツ施設（カラオケ、ゲーム、ボルダリング）スタッフ	3回
博物館、映画館、水族館 窓口/スタッフ	3回
薬局（Welcia：寮の近くにある店）店員	2回
スーパーレジ、郵便局員、医者	各1回

この結果を見ると、ホームステイ家族との接触（計30回）、あるいは、寮住まいの留学生の日本人の友人との接触（計48回）と比較し、友人やホームステイ家族以外の日本人との接触は、飲食店スタッフとの接触が6～7回程度で、回数から言うと、それ程多くないことがわかる。

この結果から、留学生のキャンパス外での日本語での接触は、飲食店などで「メニューについて聞く」「注文する」などの特定場面で多くなされていることがわかった。しかし、キャンパス外では、そのような飲食店や小売店、コンビニの店員などで行われる特定場面での接触はあるものの、教師が予想していた程、積極的には、日本語を多く使用していないことがわかった。その理由として、英語圏からの外国人との接触場面では、日本人は英語を話そうとする傾向があること、あるいは、留学生が単独の時ばかりではなく、友人である日本人学生と一緒に行動していることが多いということも考えられるが、この点についての詳しい調査は今後のフォローアップ・インタビューで明らかにしていきたいと考えている。では、ここで、前回（高屋敷2019）と今回の調査結果を総合して、下記にまとめたものを見てみよう。

英語圏からの留学生（中級レベル）の日本語接触場面

- 日常生活全般
- 日本人学生の友人やホストファミリーとの「おしゃべり・雑談」
- 特定場面での接触：飲食店の店員との接触が一番多いが、
回数はその程多くない。

雑談の話題（興味・関心事）

- 料理/食べ物、スポーツ、ゲーム、漫画/アニメ、読書
- 学期によって、日本語クラスの興味・関心事は変動する。
- ネット配信動画（Netflix）、音楽、映画、ハイキングが上位の時も多い。

前回と今回の調査から明らかになったことは、当然のことではあるだろうが、学生の興味・関心は常に変動しているということである。そして、英語圏からの中級レベル留学生が日本語接触場面で望んでいることは、特定場面での「駅で切符を買う」「メニューについて尋ねる」「レストランで注文する」などのコミュニケーションの遂行というより、日本人の友人やホストファミリーとの「特定の課題の遂行を目的としていない単なるおしゃべり」（西郷・清水 2018）をしたがっているということである。前回の報告でも述べたが、この結果を得て、今後の教材改訂においては、中級レベルに必要な「言語形式の知識」、「談話ストラテジーの知識」（西郷・清水 2018）に加えて、所謂、相槌や音声変化のルール、助詞の省略、聞き返し、繰り返しなどのインフォーマルなスピーチスタイルでの会話技術などについても教科書の会話教材や練習問題に積極的に盛り込んで行く必要があると考えている。

3. 接触場面の教材化

関西外大留学生別科での中級日本語コースでは、上記の日本語接書場面調査の結果を分析し、その都度得た新しい学生のニーズ、興味・関心を反映するように既存教材を書き換えることを継続して行っている。前回の報告でも触れたが、鎌田は、

コミュニケーション場面については、あくまで、「場面（コンテキスト）あつての文化情報であり、また、場面（コンテキスト）あつての文法なのである」と述べ、「接触場面を絞り込むことは、文脈（コンテキスト）から文型（学習項目）を探り出す作業と同質」であると指摘している（鎌田 2003:363-365）。関西外大留学生別科の中級日本語コースでも、鎌田のそのような指摘を考慮し、留学生の日本語接触場面調査の分析結果を取りいれつつ、日本語能力試験 N2 レベルでよく使用される文法項目（文型）の中で、ある文法項目が最も自然で無理なく使用される場面を選ぶという方法を採用している。あくまで留学生が望む場面を先行させ、N2 レベルのそれぞれの文型がどのような場面で用いられるか、あるいは、効果的に使用されるのはどのような場面であるかを考慮しながら、教材の改訂を続けている。下記は、JPN5 コースで行われている教室活動の一例である。

教材作成例 ①

会話練習（ペアワーク）：「～ままで いいよ／だいじょうぶだよ／平気だよ。」

接触場面：食堂で日本人の友人と雑談

Respond the following saying you like the way it is.

Example:

友だち： え？ ジョン(name of your partner) は、結婚(けっこん)したくないの？

あなた： うん、私／ぼくは、独身(どくしん: single) のままでいいんだ／の。

or 私／ぼくは、結婚しないままでいいんだ。



1. 「え？ 早く卒業したくないの？」 ⇒ (学生)
2. 「私／ぼくとつきあってください！」 ⇒ (友だち)
3. 「私、化粧(けしょう)した方がいいかな？」 ⇒ (すがお: no makeup)
4. 「今日のパーティーは、フォーマル？」 ⇒ (ジーンズ)
5. 「将来、お金持ちになりたい？」 ⇒ (びんぼう／お金・ない)
6. 「私、コンタクトレンズに変えたほうがいいと思う？」 ⇒ (めがね)

教材作成例 ②

会話練習 (ペアワーク) : 「まま (で)」

接触場面 : コンビニで会計時に店員と

店員 : ふくろ (plastic bag)、ご利用 (りよう) ですか。

- あなた : あ、(No thanks) ⇒
- a. いいです。
 - b. けっこうです。
 - c. いません。
 - d. だいじょうぶです。
 - e. そのままで

{いい・けっこう・だいじょうぶ} です。



4. おわりに

今後、このログシートによる日本語接触場面調査に加えて、書き込んだ記録についてフォローアップ・インタビューも行い、接触場面におけるコミュニケーションの問題点に関して更に詳しく調査していく予定である。キャンパス外で友人以外の日本人（飲食店の店員など）との接触が少ない理由などについてもインタビューで明らかにしていきたいと考えている。これからも学期ごとに留学生の興味・関心、ニーズがどこにあるのか更なる広範で綿密な調査をすること、その結果を分析し接触場面の目録化を行うこと、その中から学習者が望む場面での中級レベルに適した会話トピックを先行させながら文法項目を選定し、教材化していくことなどを継続していく予定である。毎学期、学生へのアンケート調査、インタビューを基に教材作成のための接触場面を蓄積していけば、その都度、変遷する学生の興味・関心に合わせて、どのような場面で日本語を習得したいかを学生にコース前に選んでもらうことも可能になるのではないかと期待している。

参考文献

- 庵功雄・山内博之（編）（2015）『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 岡崎敏雄（1989）『日本語教育の教材』アルク
- 鎌田修（2003）「接触場面の教材化」 宮崎里司・ヘレン・マリオット（編）（2003）
『接触場面と日本語教育 ネウストプニーのインパクト』明治書院
- 小林ミナ（2009）「基本的な文法項目とは何か」小林ミナ・日比谷潤子（編）『日本語教育の過去・現在・未来 第5巻 文法』pp.40-61. 凡人社
- 西郷秀樹・清水崇文（2018）『日常会話がグリーンとアップする雑談指導のススメ』
凡人社
- 高屋敷真人（2019）「中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査」『関西
外国語大学留学生別科日本語論集』28号、pp.49-65.
- 野田尚史（編）（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- J.V.ネウストプニー（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店

(mtakayas@kansai-gaidai.ac.jp)